

前山君の業績

藪内 清*

前山君が突然に亡くなられた。ほんとに突然である。8月の4日から富山県の新湊で数人が集まって貞享暦書の研究会をやった。その朝に広瀬台長と前山君は、混雑する列車で到着されたが、2人とも大変に元気で午後からはさっそく研究会をはじめた。一応会は7日で終了し私はすぐに京都へ帰ったが、前山君ほか数名は1日残って高樹文庫の調査を行われた。ここは幕末の数学者石黒信由の旧宅であり、遺書が多く残っていた。あとで聞くと文庫の調査で大分疲れた模様であった。10日の日に東京天文台からの電話で前山君が帰途軽井沢で逝去されたことを知り、全く茫然としてしまった。こんどの研究会は私があっせんしたのであり、前山君の死の直接の原因が今度の旅行にあったことを思えば、私の責任も軽くない。しかしそうした責任を考えるよりも、もっとも信頼できる友人を失った悲しみが深く私をおそった。

前山君を知るようになって、すでに10年にはなろう。ごく少ない同じ方面の研究者として絶えず文通していたが、1 昨年の夏から毎年暦法史の研究会をやることになり、第1回は高野山で授時暦、昨年は浜松近くの岩水寺で曆象考成、それに今年は3回目であった。何れも短い日数であったが、前山君の立派な人柄と着実な学風とを十分に知ることができた。来年からはいまい少し集中的な研究をやろうと相談していたが、それも空しい。前山君は東京天文台で曆象年表の計算をやっておられた。いつか百濟教猷先生が「大言壮語するものは曆計算には向かない」といっておられたが、前山君はこうした仕事には打ってつけの人であった。無口でしかも着実な仕事をこつこつとつづける学者であった。平常から健康に恵まれていなかったようであるが、生前かなり各地を旅行され、日本暦法史の資料を調査されていた。私も数回、前山君が調査された後に同じ所を訪れたことがある。昨年の秋に長崎図書館に行った時、数日前に前山君が来られたことを知った。重い複写装置を持って、重要な資料を精力的に写しとられた。8月10日の高樹文庫の調査でも、暑い文庫の中で何十本かのフィルムを消費されたようである。歴史研究には何としても根本資料が必要である。現在前山君ほど暦法史の文献の所在を知っていた

学者はなかった。今年の研究会でも文献のことになるかと前山君の独壇場であった。1 昨年の研究会の時にくらべ、前山君の学識が一段と深くなったのに、私はひそかに驚いたほどであった。写し終えた資料は、また克明に目を通しておられ、1つ1つの文献の内容についても私たちは絶えず教えられた。簿記帳のような厚いノートにカッコリした文字で、調査したり思いついたりしたことを書きこんでおられた。このノートは現在では何冊になったことであろう。江戸時代の天文学者渋川景祐のように、実にたんねんに記録をとっておられた。前山君の机上には文献や論文のカードも整然ととのえられていた。何かの形でこれらのノート類が発表されればと念願する。

前山君の仕事はいよいよこれからの段階であったように思う。立派な室はすでに胸中に深く蔵されていたが、惜しいことに発表された論文は少ない。専門とする日本暦法史の関係では別項に掲げたものがある。

発表された限りでは寛政暦や天保暦、それに天文学者として高橋至時やその子の渋川景祐に深い関心を持っておられた。これまで中国の暦法をほとんどそのまま使っていた日本人が、非常な苦心の末に西洋天文学を理解し、それをとり入れて行った過程に深い興味があったらしい。高橋至時の苦心や父の事業を完成させた渋川景祐の人柄は、そのまま前山君のものであったように思われる。東京天文台には平山清次先生、小川清彦氏など日本暦法史のすぐれた研究者がおられたし、その方面の蔵書にも貴重なものが多い。前山君の以上の論文は、東京天文台の蔵書を中心に行われたものであるが、深い知識の一端を示されたに過ぎなかった。前山君の研究はもちろん江戸後期の暦法だけではなく、ことに最近では東京大学史料編纂所の桃教授とともに、宣明暦の研究とそれが行われていた時代の暦書の調査を熱心にやられていた。この方面の成果が全く世に出ていないことは、何としても残念なことである。

与えられた紙数が尽きた。東京天文台には日本暦法史研究について長い伝統がある。どうかこれをつづけて前山君の後継者が育つことを期待している。(1963. 9. 5)

前山仁郎君を偲ぶ

佐藤 友三**

* 京大人文科学研究所

** 東京天文台

私が天文台へ転勤して来たのは戦争も末期に近い昭和19年4月上旬で、その頃前山君は福見先生の下で数十

名の人を指揮し、戦時中の悪条件の下で FK 3 星系の三鷹子午線経過時の視位置の推算に専念し、しばしば徹夜をして推算の完成に力を注いでいた。福見先生が 21 年 3 月に退官されてからは中野三郎氏及び私と同君の 3 人で暦象年表の編成に関する一切の業務並びに理科年表暦部の計算を分担した。当時は外国の天体暦を入手することが出来ないため暦象関係の諸現象の計算を完成するには並大抵の苦勞では済されなかった。如何にして発表期日までに正確な結果を求めるかについては、しばしば激論を戦わしたもので、今となっては懐しい思い出である。昭和 26 年度から暦象年表の編成に関する一切の業務及び理科年表暦部の編成を担当し、これらの改良と正確な暦書の編成に一意力を注いでいた。その後、編暦と関連して暦法の研究を始め、昭和 31 年末頃に東京史料編纂所の桃教授と共同で本邦宣明暦行用時代の暦日の研究に着手し、昨年末までに貞観四年(826)年より貞享元年(1684)年までの 823 年間の廿四節氣、日没及び驚蟄が経朔に含まれる定期の計算を完了している。又暦法研究の便に供する目的で昭和 32 年より本邦古暦史料の蒐集をはじめ、日本の各地に古天文書の探訪を行って、昨年末までに、資料を取めたカード及びフィルムコマは数にして併せて 23,000 枚に達している。更に科学史の研究にも着手し昭和 37 年度より江戸時代の天文学という総合研究の課題分担者となって江戸時代の天文学者の業績を中心とする研究を始めた。同君は上述のように科学

史関係の諸研究に意欲をもやし、それ等の完成を目指して今年も既定の計画に従って着々と研究を進めていたのである。

旅行先で同君が発病し倒れ、入院したとの報に接したのは 8 月 9 日の 9 時頃であった。その病名は脳卒中とのこと——成程 8 月 3 日に同君が古暦史料の探訪及び科学史関係の研究連絡会に出席する為に富山県新湊町に向って出発している。その帰路での発病だなど思ってはみたが——平生同君自身が低血圧であるといっていたため、脳卒中で倒れたとは到底私には考えられないことであった。多分人違いではないかとそんなに気に懸けなかったのである。しかし取敢えず家族の方及び台長にこの事を伝えはしたものの、如何にしても信ぜられないことなので長距離電話で病院に問い合わせさせ、色々と尋ねた結果同君に相違ない、その上わるいことには仲々の重態であることが判明し、直ちに台長にこの旨を伝え適宜の処置をして頂いたのである。しかし、その後の容態が気懸なため、13 時頃再び病院に容態を問い合わせた結果、12 時 35 分に亡くなられたとの凶報に接し余りのことに愕然とした。長年に亘り蒐集した研究資料を同君が着実に整理し、一步一步と研究の完成に向って努力していたこの数年間の様子を思い浮べるとき、同君の急逝は誠に惜みても余りあることで、諸行無常の感を今更ながら深くせざるを得ない。(昭和 38 年 9 月末)

北海道日食観測記

辻村民之*

7 月 21 日早暁、快晴の北海道知床半島・羅臼平(標高約 1400 米)にあって、京都大学生駒山太陽観測所日食観測隊は、東空低く遙かソ領国後島チャチャ岳の左上方に太陽コロナの撮影に成功した。

生駒山太陽観測所で今度の皆既日食を観測しようと計画したのは今年に入ってからである。従って日食委員会の計画に発表されず、観測費の調達に苦慮し、やっと旅費だけは何とかなって観測行を決定したのは、日食にあと二ヶ月、勿論観測機器の準備や観測地の状況調べは事前より進めていた。

観測行には堀井政三講師と小生のスワロフ・メンバーに今秋ペルー・ワンカイヨに行く予定の野村常雄君が初めての皆既日食を見て、未知の北海道を旅してのち南米に渡りたいとの希望から同行協力することになった。

観測はコロナ流線の撮影を目的とし 1.5 米焦点(F20)

の関西光学製カセグレン式鏡筒にトヨ・ビューカメラのピント部分を装置し、4×5 判パック・フィルム(ASA 100)に短時間露出によって内部コロナをねらい、一方望遠レンズ(コムラー 500 mm, F7)を用い 35 mm フィルムに外部コロナを撮ることにした。

観測地の選定には霧のもっとも多い 7 月の北海道ではあるが、早朝の霧は生駒山における経験では雲海として低く沈んでいるところから、高い山に登れば晴天である限り霧の心配は少ないであろうし、又日の出直後の低い太陽高度の点にも少しでも利するとあって、知床半島の羅臼岳近辺と始めから考え、登山の難易、キャンプの適否等について現地羅臼町役場等に問合せたりして準備を進めた。

7 月 17 日、目的地羅臼町に到着した。現地調査をしていない我々にとって、羅臼岳に登山する前に一応の準備を整えたり、計画の進行上、町営羅臼荘をいわば本拠地とした。ここは羅臼町より更にバスで約 10 分、羅臼

* 京大生駒山太陽観測所